

2018年11月8日

日本イーライリリー株式会社

〒651-0086
神戸市中央区磯上通 5-1-28
www.lilly.co.jp

EL18-52

～ 11月14日は「世界糖尿病デー」～ インスリン治療を50年以上継続している糖尿病患者さんを顕彰 第16回「リリー インスリン50年賞」23名の受賞者を発表

日本イーライリリー株式会社(本社:兵庫県神戸市、代表取締役社長:パトリック・ジョンソン、以下、日本イーライリリー)は、インスリン治療を50年以上継続されている糖尿病患者さんに敬意を表し顕彰する、第16回「リリー インスリン50年賞」の授賞式を11月7日(水)に開催しました。

第16回となる本年は、過去最多となる合計23名の方が受賞されました。そのうち18名の方が授賞式に参加され、50年以上にわたるインスリン治療の道のりを振り返りながら、家族や主治医など周囲の方々への感謝や、他の糖尿病患者さんへの励ましのメッセージなどを力強くお話されました。受賞者の皆様には、ご本人のお名前を刻印した銀製の特製メダルと、世界糖尿病デーのシンボルカラーである青いバラのコサージュが贈られました。

授賞式には日本糖尿病協会 理事で東京女子医科大学東医療センター 病院長の内潟安子先生、日本糖尿病学会 監事で東京女子医科大学 糖尿病センター 内科 教授の馬場園哲也先生、海老名総合病院 糖尿病センター長で東京女子医科大学 名誉教授の大森安恵先生、日本 IDDM ネットワーク 専務理事の大村詠一様にご臨席頂きました。糖尿病と妊娠についてご研究をされてこられた大森安恵先生は「この賞の第1回から授賞式に参加していますが、特に今年は大変多くの方が受賞され、また私にとっても妊娠という深いご縁のある方が5名もおられ、大変感動的な式となりました。過去の受賞者について論文を二つ書きましたが、書きながらそのご苦勞を知り幾度泣かされたか分かりません。本日の受賞者の皆様にも多くのご苦勞がございましたかと思えます。これから先より一層お元気で過ごされることを信じて詩を贈ります」と述べられ詩をご披露されました。

授賞式で日本イーライリリーの代表取締役社長 パトリック・ジョンソンは、「イーライリリー社は1923年に世界で初めてインスリンを製剤化した企業です。今回糖尿病治療を50年以上続けられている皆様にこのような賞をお届けできることを大変光栄に思い、また皆様の治療継続のご努力に心から敬服いたします。今後も世界中の糖尿病を持つ方々の生活改善に務めてまいります。」と語りました。

日本イーライリリーは今後も、画期的な糖尿病治療薬の研究、開発および情報提供活動に尽力していくとともに、「リリー インスリン50年賞」をはじめとしたサポート活動を通じて、糖尿病と日々闘う患者さんに寄り添い、糖尿病治療におけるベストパートナーを目指してまいります。



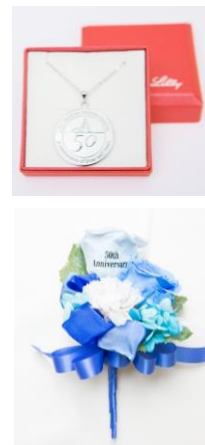
※写真に写っているのは、報道関係者様への情報公開をご了承頂いた受賞者の皆さんになります。

「リリー インスリン 50 年賞」とは

インスリン治療を 50 年以上継続されている糖尿病患者さんの長年のご努力を称えることを目的に、1974 年に米国で始まりました。これまでに米国を中心に世界で 14,000 名以上の患者さんに授与されています。日本では 2003 年に表彰を開始し、第 16 回を迎えた本年度を含めてこれまでに 142 名の患者さんが同賞を受賞されています。

表彰式は毎年、世界糖尿病デー(11 月 14 日)の前に開催しており、今年を受賞者の皆様に、ご本人のお名前を刻印した銀製の特製メダルと、世界糖尿病デーのシンボルカラーである青いバラのコサージュを贈呈しました。

日本イーライリリーは、「リリー インスリン 50 年賞」を受賞された患者さんが、インスリン治療を継続する全ての糖尿病患者さんに勇気と希望を与え、治療に前向きに取り組む上での目標となることを願っています。



第 16 回「リリー インスリン 50 年賞」受賞者プロフィール

※50 音順になっています。

※五十嵐様、岩田様、大岩様、加藤様、神田様、續様、福島様、堀田様には授賞式にご参加いただきました。

※報道関係者様への情報公開をご了承いただいた患者さんのみご紹介しています。

※受賞者プロフィールの内容は、患者さん個人としての見解です。

◆五十嵐 義男 様 (インスリン治療歴 53 年 / 1 型糖尿病 / 1937 年生まれ / 東京都在住)

25 歳頃、すごく水を飲むことが増え、趣味の山登りで足が思うように動かなくなり、診療所へ。そこで糖尿病と診断されましたが割と呑気でした(笑)。31 歳で結婚して、これまであまり節制はせず、あくまで家族と楽しく過ごすことを優先してきました。3 人の子どもに恵まれ、一緒に散歩に出かけたりいつも家族一緒に過ごしていました。あとは、65 歳まで休むことなく一生懸命に仕事をしました。国会議事堂のすぐそばで、ビジネスマンが息抜きにいらっしやるような職場でした。

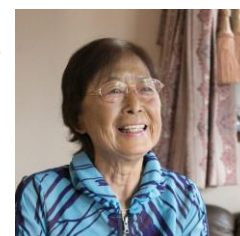
定年後は、今までずっと支えてくれた妻と全国各地を歩いて回る日々を満喫。今でもテレビで訪れた場所が移ると、「あそこ、歩いたよね」と妻と話し、夫婦円満で笑いの絶えない毎日を過ごしています。今は昔と違い、インスリン注射をするのが本当に楽になりましたね。私のこれまでの経験から、インスリンさえあれば、どこへでも行けると実感しています。



◆岩田 和子 様 (インスリン治療歴 51 年 / 1 型糖尿病 / 1940 年生まれ / 東京都在住)

当時医学生だった夫との結婚を決めた 24 歳に糖尿病が発覚。もともと私の姉が若くして糖尿病だったので、夫の知人の先生に、念のため検査を勧められました。自覚症状は一切ありませんでしたが、検査結果は糖尿病。長男の妊娠を機にインスリン治療を始めました。32 歳で長女を出産した後は夫についていき、パリ、ニューヨークへ。私も教員免許を持っていましたので、ニューヨークでは日本人学校の教師として働きました。

現在は、娘一家と二世帯で暮らしています。孫には、保育園の頃から一緒に本を読んだり、英語の勉強をしたりと、いろいろなことに挑戦してもらっています。28 年前から人工透析を続け、数年前から視力もかなり低下してきましたが、孫たちの成長を見守るのが楽しみでしようがない毎日です。



◆大岩 しずり 様 (インスリン治療歴 50 年 / 1 型糖尿病 / 1967 年生まれ / 愛知県在住)

0 歳 9 カ月ごろから糖尿病の症状があり、1 歳になる前に糖尿病の診断を受け、インスリン治療が始まりました。まだ幼い頃、冬の夜中に低血糖になり病院へ行き、帰りに交通手段がなくて父が私をおんぶして 5 駅分くらい歩いて帰ってくれたことを今でも覚えています。小学校 4 年生ごろからは低血糖になることが増え、不安な日々を送っていました。25 歳で入院したとき、決められたカロリーを摂取しても血糖値が安定しないことから、不安定型だと診断されました。担当の先生に「1 日の変動は気にせず、1 カ月の血糖値を長い目で見てい



けばいいよ」と言われ、不安から解放された思いでした。その後も信頼できる先生方との出会いに救われてきました。

私たち患者には、人に話しぶいことや、うまくいかないこともあります。それでも血糖値を測ってコントロールをしていけば、周りと変わらず無事でいられます。この 50 年賞が、「まだまだ理解されにくいこともあるけれど、ひとりじゃないから頑張ろうね」と、患者さん同士の励みになればいいなと思っています。

◆加藤 武 様（インスリン治療歴 53 年 / 1 型糖尿病 / 1938 年生まれ / 岩手県在住）

昔から身体を動かすことが好きで、高校時代には陸上競技の三段跳びで岩手県のチャンピオンになったこともあります。高校を卒業後、地元の町役場、料亭を経て温泉旅館へと転職しました。ですが、だんだんと布団の上げ下ろしが辛くなり、ひどいときは今より 10kg くらい痩せてました。これが 26 歳頃で、おそらく糖尿病を発症したのはその頃です。「おそらく」というのは当時、糖尿病を理解している方は少なく「水たまりにおしっこをして泡立ったら糖尿病だ」なんて言われた時代でしたからね。でも、自分なりに食事の量を加減して、インスリン治療を続けながら、なんとか 80 年間生きてきた気がします。

今の趣味は週 1 回のゲートボール。15 年前から故郷の老人ホームでお世話になっていて、そこで仲間と楽しんでいます。主治医の方も気さくな方で、とにかく私がしゃべるものだから、私の診察はいつも最後。いい先生に出会えて良かったと思っています。



◆神田 光子 様（インスリン治療歴 50 年 / 1 型糖尿病 / 1940 年生まれ / 長野県在住）

発症したのは 27 歳。長野県の職員として働いていました。長男を妊娠したときは、自己測定器がなかったので苦労しました。2 人目になるとなおさらで、どこにも引き受けてもらえなかったのですが、絶対に諦めたくなかったし、立派に産んでいる方がいると知っていたので、東京女子医科大学の大森安恵先生を紹介してもらい、長男を長野に預け上京しました。すると先生が「努力してみましょ」と引き受けてくださり、食事療法もインスリン治療も管理していただける環境で 6 ヶ月間入院し、安心して長女を出産できました。産休明けからすぐ働いていましたが、朝起きて会社に行かなきゃいけないと思って働き続けたことは、良い治療になったと思っています。50 年間、インスリン治療を続ける原動力になったと思います。いろいろ苦労もありましたが、孫娘も 2 人おり、先生方のおかげで、私は本当に幸せです。



◆續 世津子 様（インスリン治療歴 52 年 / 1 型糖尿病 / 1956 年生まれ / 大阪府在住）

双子の姉とふたりで学校から帰る途中で私が転び、そのまま動けなくなってしまいました。翌日病院に行き糖尿病と診断、10 歳の頃でした。中学生になる頃には、インスリン治療がうまく軌道に乗り始め、周りの友だちと変わらない学生生活を送ることができました。高校時代は、家族から「いつも家にいないね」と言われるくらい、アルバイトも遊びも謳歌していました。

19 歳の頃から付き合っている今の主人と結婚し、姉とおしゃべりをしたり、愛犬の散歩をしたりと、毎日楽しく過ごしています。今思えば、これまでの私の人生は、糖尿病になってからも悲壮感はなかったように思います。今は、姉との他愛の無いおしゃべりが私の大切なひとときです。



◆福島 昭男 様（インスリン治療歴 54 年 / 2 型糖尿病 / 1936 年生まれ / 岡山県在住）

長男が 1 歳半になり、これからが働き盛りという 20 代後半に糖尿病だと診断されました。喉の渇きも空腹も尋常ではなく、体重がみるみるうちに増え「なんだか、おかしい」と感じて病院に行ったところ、診断結果は糖尿病でした。

初期のインスリン治療では、1 ヶ月に 2 本与えられる針を何度も煮沸消毒して使っていました。社会の理解がまだまだない時代ですので、インスリン治療を続けながらの会社勤めは大変でした。妻は食事療法を学び始め、ご飯の量を減らしておからやこんにやくで満腹感を得られるように工夫をしてくれたり支えてくれました。

今の趣味はパークゴルフ。18 ホールを回っても疲れ知らずで、週に 3~4 回のペースで妻と楽しく続けています。



◆堀田 梅雄 様 (インスリン治療歴 51 年 / 1 型糖尿病 / 1950 年生まれ / 大阪府在住)

17 歳で糖尿病の診断を受けた翌日から約 2 年間、家から 3km ほど離れた病院まで毎日インスリン治療に通っていました。20 歳になり、兄の紹介で大学病院を受診し、糖尿病発症から 3 年以上経って初めて、注射の打ち方や栄養のコントロールについて学びました。25 歳から 50 歳までの間に様々な合併症に苦しみ入退院を繰り返しましたが、そんな時期を乗り越えられたのは、兄夫婦のおかげです。私が倒れて入院したときは兄たちが駆けつけてくれ、姪っ子が料理を運んでくれたり。毎日のように電話をくれる姪っ子には今もすごく助けられています。

50 歳で趣味としてカメラを始めてからは、不思議なくらい体調も良好になっていきました。ただ「散歩に行かなくちゃ」というよりも、外に出かけるのが楽しみになるし、野鳥の会を通じて仲間との交流も楽しんでいます。



過去のプレスリリースはこちらから → <https://www.diabetes.co.jp/csr/award/default.aspx>

世界糖尿病デーとは

拡大を続ける糖尿病の脅威を踏まえ、2006 年 12 月 20 日、国連は国連総会で、国際糖尿病連合 (IDF) が要請してきた「糖尿病の全世界的脅威を認知する決議」を加盟 192 カ国の全会一致で可決しました。同時に、従来、IDF ならびに世界保健機関 (WHO) が定めていた 11 月 14 日を「世界糖尿病デー」として指定しました。IDF は決議に先駆け、「Unite for Diabetes」(「糖尿病との闘いのため団結せよ」というキャッチフレーズと、国連や空を表す「ブルー」と、団結を表す「輪」を使用したシンボルマークを採用。全世界での糖尿病抑制に向けたキャンペーンを推進しています。

(出典: World Diabetes Day Committee in Japan http://www.wddj.jp/01_howto.htm)

イーライリリー・アンド・カンパニーの糖尿病事業について

イーライリリー・アンド・カンパニーは 1923 年に世界で初めてインスリン製剤を開発して以来、糖尿病ケアの分野において常に世界をリードしてきました。現在も、糖尿病をもつ人々やケアを行う人々の様々なニーズに応えることで、この伝統を築いています。研究開発や事業提携、拡大し続ける幅広い医薬品ポートフォリオ、そして、医薬品からサポートプログラムをはじめとする実質的なソリューションを提供し続けることを通じて、世界中の糖尿病をもつ人々の生活の改善に努めます。

詳細はウェブサイトをご覧ください。 <http://www.lillydiabetes.com>

イーライリリー・アンド・カンパニーについて

イーライリリー・アンド・カンパニーは、世界中の人々の生活をより良いものにするためにケアと創薬を結び付けるヘルスケアにおける世界的なリーダーです。イーライリリー・アンド・カンパニーは、1 世紀以上前に、真のニーズを満たす高品質の医薬品を創造することに全力を尽くした 1 人の男性によって設立され、今日でもすべての業務においてその使命に忠実であり続けています。世界中で、イーライリリー・アンド・カンパニーの従業員は、それを必要とする人々の人生を変えるような医薬品を開発し届けるため、病気についての理解と管理を向上させるため、そして慈善活動とボランティア活動を通じて地域社会に利益を還元するために働いています。

日本イーライリリー株式会社について

日本イーライリリー株式会社は、米国イーライリリー・アンド・カンパニーの日本法人です。人々がより長く、より健康で、充実した生活を実現できるよう、革新的な医薬品の開発・製造・輸入・販売を通じ、がん、糖尿病、筋骨格系疾患、中枢神経系疾患、自己免疫疾患、成長障害、疼痛、などの領域で日本の医療に貢献しています。

詳細はウェブサイトをご覧ください。 <http://www.lilly.co.jp>